

---

〈研究ノート〉

## スコットランドの国民意識あるいは領土意識\*

—— 中世スコットランドの窓から ——

## Scottish nationality, or, territorial consciousness

—— Out of Windows in the medieval Scotland ——

久保田 義 弘

---

### はじめに

この研究ノートでは、ケルト系移民のスコットランド地域への侵入から中世スコットランドにかけて形成されたスコットランド人としての国民性あるいはアイデンティティをその領土拡張の歴史を逐って検証することを目的にしている。特に、イングランドとの国境線の確定が彼等にスコットランド人を意識させ、さらにイングランド人との異質性を意識させたかもしれないその歴史を概観する。しかし、1707年以降、300年の間、イングランド人もスコットランド人も「British」（イギリス人）として、恰も同じ国民であるかのように活動してきた。しかし、20世紀の末に、「グレートブリテン」（イギリス）が、一方で、EUに加盟し、ヨーロッパの一員になり、その帝国を喪失し、他方で、イングランド人、スコットランド人あるいはウェール人の意識が噴出し、この300年間に形成されたイギリス人という感覚が失われてきている。その一端がスコットランドの分権・独立運動にあらわれている。本稿では、主に、中世スコットランドにおいて形成され、蓄積されてきたと思われるスコットランドの国民性（国民意識）を探る。

スコットランド地域は、ローマ人によってカレドニア (Caledonia) と呼ばれ、5世紀頃にはカレドニア人あるいはその系統のピクト (picts) 人が住んでいた。ピクト人はケルト (Celt)

---

\* この研究ノートは、2007年度に札幌学院大学「研究促進奨励金（総合研究）」（研究課題番号 SGU-107-189020-01）の対象になった研究に基づいている。その研究課題は「スコットランドに見る伝統的文化遺産（再評価の動向）と地域社会再生戦略」であった。この研究課題探求は、久保田義弘（本学経済学部教授）を研究代表にして、石井和平（本学社会情報学部教授）、内田 司、岡崎 清、富田充保、坪井主税（以上本学人文学部教授）の6名で進められているが、この研究ノートは、私個人の責任で執筆したものであり、他の共同研究者には何の論責もない。この研究ノートの作成にあたり、「スコットランド王国史話」（森護著）を参照させて戴きました。史実の解説についても参考にさせて戴きました。感謝申し上げます。

系であったが、スコット (Scots) 人とは異なる系統に属していた。現在のスコットランドの形成に中心的な働きをなした民族はスコット人であった。スコット人はアイルランドから侵攻してきたケルト系移民であった。5世紀前半のころ、カレドニア地域には、4部族が部族王国を形成し割拠していたと考えられる。その部族の分布図であるが、現在のスコットランドの北部および中部にかけてのハイランド (Highlands) 地域にはケルト系ピクト人が居住し、その南西部のストラスクライド (Strathclyde) 地域にはケルト系ブリトン (Britons) 人、その南部中央のロージアン (Lothian) 地域ならびに南東部のノーサンブリア (Northumbria) 地域にはゲルマン系アングル (Angles) 人、その西部のアイルランド寄りのギャロウエイ (Galloway) 地域にはケルト系スコット人が居住していた。ローマ人がカレドニアと呼び、ピクト人がオールバと呼んだ地域である、ブリタニア島の北端に位置するケイスネス (Caithness) から南はフォース湾 (Firth of Forth) に至るまでの地域には、ピクト人が居住していた。

5世紀末から6世紀の初めごろ、ファーガス2世 (ファーガス・モー・マック・エルク) (Fergus II, Mor mac Erc) (501年頃没) は、キンタイヤ (Kintyre) 半島のアド川 (Add River) ほとりのドナド (Dunadd) にダル・リアダ (Dal Riada) 王朝<sup>1</sup>を樹立し、初代国王になった。この王国樹立は、先住民であるピクト族との間に、激しい抗争を引きおこした。9世紀の初め頃、ピクトのオールバ (アルバ) (Alba) 王国の国王が早世し、世継ぎが途絶えたので、ダル・リアダ王朝のアルピン (Alpin) 王 (834年没) がオールバ王国の王位継承を要求したが、オールバ王ならびにピクト人はそれに激怒し、アルピン王を拘束し、834年、彼を南西部のギャラウエイ (Galloway) で処刑した。その後直ちに王位を継いだのがマクアルピン (Maclpin) であり、彼は、ケニス1世 (Kenneth I) として839年 (あるいは841年) にダル・リアダ王国の王位に就いた。846年にオールバ王国に決戦を挑み、それに大勝した。オールバ (アルバ) 王国の王位も継承し、ダル・リアダ王国 (スコット族の王国) とオールバ (アルバ) 王国 (ピクト族の王国) の連合王国 (国名オールバ王国) を建設したのは、ケニス1世マクアルピン (在位839あるいは41年-859年) であった。この連合国は、南部ロージアン (Lothian) を完全では無いが一応勢力下に置くことに成功した (973年)。しかし、ケニス2世 (在位971年-995年) は、中央スコットランドの統治に努めたが、その統治の道半ばに、豪族の夫人<sup>2</sup> が差し向けた刺客に惨殺された<sup>3</sup>。

11世紀になってからエディンバラがスコットランド領に組み込まれた。それは、マルカム2世 (Malcolm II) (在位1005年?-1034年) の時代であった。彼は、力による統治に乗り

<sup>1</sup> ダル・リアダ王朝は、その後、アルピン王家が誕生する (839年) まで続いた。

<sup>2</sup> 豪族マーンズ領主の夫人フェネリアであった。彼女の息子を殺害した恨みによる復讐であった。

<sup>3</sup> 第13代目の国王コンスタンティン4世 (在位995年-997年) は、戦死し、第14代目の国王ケニス3世 (在位997年-1005年) は、従兄弟のマルカム2世によって殺害された。

出し、アングル族の国ロージアン (Lothian) の平定に乗り出し、ロージアンをスコットランド領に併合した (1018 年)。次に、ストラスクライド (Strathclyde) のブリトン王が継承者のいないままに他界したので、マルカム王は、その国の継承者を孫のダンカン (Duncan) (ダンカン 1 世 (在位 1034 年-1040 年)) にすることに成功した (1018 年)。マルカム 2 世は、ロージアン併合によってスコット、ピクト、そしてアングルの 3 民族を統合する連合王国を作り上げ、さらに孫のダンカンをストラスクライド王の後継者にすることに成功し、ブリトン族を加えた 4 部族に君臨した。その国名は、オールバ王国からスコウシア王国 (Kingdom of Scotia) と呼ばれるようになった。ダンカン 1 世 (在位 1034 年-1040 年) は、スコットランド王とストラスクライド王を兼務した。その支配版図では、イングランドとの境界は現在のスコットランドとイングランドを分ける境界線 (国境線) に近かった。「スコットランド人」としての領土意識、国家意識は、この境界線を基準にしている。

11 世紀になって、領土を拡げ、イングランド王国と国境を接するようになった。このことによって、南ではイングランド、北あるいは西ではスカンジナビア人やノルウェー人との直接的な接触が起こることになった。マルカム 3 世 (Malcolm III) (在位 1058 年-1093 年) の子であるエドガー (Edgar) 王 (在位 1097 年-1107 年) は、「イングランド王の臣従者」を宣言し、南部ロージアンにアングル人やノルマン人の進入を許し、またスカンジナビア人の既得権益を許し、ヘブリディーズ諸島 (Hebrides) やキンタイヤを失い、それをノルウェー領にしてしまった。

エドガー王の弟アレグザンダー 1 世 (Alexander I) (在位 1107 年-1124 年) の治世時、南部のロージアン、ストラスクライドの統治は弟のデイヴィッド (David) (後のデイヴィッド 1 世) に任せ、自身はフォース湾から北部のスペイ川 (River of Spey) 河口に至るまでの中部、南部の統治をし、西部や北部のロス (Ross) やマリ (Moray) などは直接統治せずに領主に任せた。デイヴィッド 1 世の子のマルカム 4 世 (Malcolm IV) (在位 1153 年-1165 年) は、ハンティンドン・ノーサンプトン伯領 (Earl of Huntingdon-Northampton) を与えられたことの代わりに、ノーサンバーランド (Northumberland) の支配権をイングランド王ヘンリー 2 世 (Henry II) (在位 1154 年-1189 年) に奪い取られた (1157 年)。ヘンリー 2 世は、スコットランド王を自分の宮廷に引き入れ、王弟ジェフロワやステューヴン王の子女ウィリアムと同様に、自分の領土の一体性維持の責務 (封土と騎士奉仕役務関係の封建制度) を担う存在としてスコットランド王マルカム 4 世を見なしていた。

12 世紀初めには、ギャラウェイやケイスネス (Caithness) やサザーランド (Sutherland) が領土に加えられた。1160 年頃にはギャラウェイがその領土に組み込まれていた。アレグザンダー 2 世 (Alexander II) (在位 1214 年-1249 年) は、イングランド王ヘンリー 3 世 (Henry III) (在位 1216 年-1272 年) との間でヨーク条約を締結し、スコットランドとイングランドと

の国境を東部のトゥweed川 (River of Tweed) と西部のソルウェイ湾 (Solway Firth) を結ぶことで同意した。現在の国境線の始まりであった。南部でのイングランドとの関係が安泰になったので、アレグザンダー 2 世は、内政の充実に乗り出し、デイヴィッド 1 世が先駆けていた行政組織を全国に行き渡るようにし、またウィリアム 1 世のとき (1202 年) に配下に入れた北部のマリ地域や最北端のケイネスやサザーランドでの反乱を抑えて、その地域もスコットランド王国の支配下に入れ、封建制度の北部浸透の道を開いた。

13 世紀には、ヘブリディーズ諸島がその領土に加えられた。アレグザンダー 3 世 (Alexander III) (在位 1249 年-1286 年) は、北方の海賊ノルウェー軍の駆逐に取りかかった。彼は、1261 年に、ヘブリディーズ諸島の奪回に成功した。1263 年には、クライド湾 (Firth of Clyde) に侵攻してきたノルウェー王ホーコン 4 世 (Håkon IV) (在位 1217 年-1263 年) が率いるノルウェー軍を迎え撃ち、ラーズ (Largs) の戦いでアレグザンダー 3 世は、ノルウェー軍に壊滅的な打撃を与え大勝し、ノルウェー王マグヌス 6 世 (Magnus VI) (在位 1257 年-1280 年、父ホーコンの存命中は共同統治) とパース (Perth) で平和条約を結び、1266 年にヘブリディーズ諸島を正式にスコットランド領にした。

15 世紀の後半にオークニ諸島 (Orkney Islands) やシェトランド諸島 (Shetland Islands) をスコットランド領に加え、今日のスコットランドの領土になった。ジェイムズ 3 世 (James III) (在位 1460 年-1488 年) の摂政会議の一員であったボイド卿ロバート (Robert Boyd, Earl of Boyd) (1469 年没?) は、国王をエディンバラ城に取り込み、自ら国王警護長官を名乗り、王室財務長官につき、王権を壟断した。彼の功績は、ジェイムズ 3 世の王妃としてデンマーク王国の女王マーガレットを迎えたことであった。当時、結婚には多額の持参金が付きものであったが、スコットランドは手許不如意から現金を要求したが、デンマーク王クリスティアン 1 世 (Christian I) (在位 1448 年-1481 年) も手許不如意から後に現金を送る代わりに、オークニ諸島、シェトランド諸島を持参金とした。このことによって、スコットランドの北部あるいは西部海岸を荒らした海賊の根拠地あるいは中継地がスコットランド領になったことは現金では賄えない大きな収穫であった。その後、18 世紀になって、スコットランドの領土拡張は、イングランドとの「連合王国」を形作ることによって展開された。それは、「同君連合」 (Personal Union) から「連合王国」に発展させることによって可能になった。

15 世紀と 16 世紀には、スコットランドでは有力貴族の力を削ぎながら王権の伸張が試みられ、ジェイムズ 4 世 (James IV) (在位 1488 年-1513 年) の治世において、王権の花が開いた。それはジェイムズ 4 世の個人的な資質によるものもあったが、スコットランド王ジェイムズ 1 世 (James I) (在位 1406 年-1437 年) やジェイムズ 2 世 (James II) (在位 1437 年-1460 年) において、有力貴族の勢力を削ぎ、王権を強力にしてきた政策が功を奏し開花したのがジェイムズ 4 世の治世であったと考えられる。ジェイムズ 5 世 (James V) (在位 1513 年-1542

年)とメアリー女王(Mary) (在位 1542 年-1567 年)の治世下では、イングランド王ヘンリー 8 世 (Henry VIII) (在位 1509 年-1547 年) の帝国政策に圧されて、スコットランド王権は危機に直面した。

ジェイムズ 6 世 (James VI) (在位 1567 年-1625 年) のスコットランドの統治方法は、彼自身はロンドンにいて、ペンでスコットランドを治めた。スコットランド総督を 2 代レノックス公リュートヴィック・ステュワート (Ludovick Stewart, 2<sup>nd</sup> Duke of Lennox) (1574 年生-1624 年没) とした。またジェイムズ 6 世の「同君連合」の統治論では、両国の議会を連合形態に持ち込み、同時に、宗教による両国の連合を図ることを考えていた。しかし、この問題は、彼の手には負える問題ではなかった。彼の考えた両国議会の連合は、アン女王 (Ann Queen) (在位 1702 年-1714 年) 時代に「連合王国」として実現した。イングランドは連合を推進した。これは、単に王位継承の問題だけではなく、多くのその他の懸案も連合王国議会が決議することを目論んで、連合を推進した。一方、スコットランドは、連合がイングランドの乗っ取り以外の何ものでもないと判断し、警戒していた。1706 年、ロンドンにて両国は 31 人の代表によって連合会議を開いた。この会議では、スコットランドの教会組織、裁判、司法制度はそのままにすること、各都市の特権は引き続き認めること、そしてスコットランド議会は閉じてイングランド議会と合同し、ならびにハノーヴァー家 (House of Hanover) への王位継承が同意された。翌年、1707 年 5 月 1 日、「連合法」(The Act of Union) が施行され、イングランド王国とスコットランド王国を合わせた「グレートブリテン」が創設された。

## 第 1 節 5 世紀頃のスコットランドと民族

スコットランドは、現在、ブリタニア島(グレートブリテン島<sup>4</sup>)の三分の一を占めている。スコットランドの地域に居住していた民族(部族)に関する資料は、ローマ人占領時の紀元 1 世紀以降のブリタニア島に関するものが殆どである。5 世紀頃には、スコット<sup>5</sup> 人、ピクト人<sup>6</sup>、アングル人<sup>7</sup>、ブリトン人の 4 民族がスコットランド地域に居住していた。4 民族が互い

<sup>4</sup> ユリウス・カエサルが BC 55-BC 54 年にブリタニア島に侵攻したときには、ブリテンには 2 つの異なるケルト民族が居住していた。フォースニクライド地峡を境に南の全島域に住んでいたブリトン人、その北にはカレドニア人が住んでいた。ブリトン人はケルト語 (Pケルト語) の一種であるブリトン語を話していた。カレドニア人の言語は不明であるが、ブリトン語と近い言語を話していたと思われる。

<sup>5</sup> スコット人のルーツは、現在のアイルランド北部のアントゥリムを中心とする地域に住んでいた。ローマ人がブリタニアから退散した後に、スコットランド西部のアーガイルに侵攻してきた。スコット人の先祖はアイルランド人である。

<sup>6</sup> ケルト系ピクト人の先祖は、紀元前 1000 年頃にヨーロッパ大陸から移住してきたケルト系ブリトン人あるいはスキト人と言われるが、詳細は不明である。体に色を塗り付ける (刺青の) 風習があるところから、これをローマ人が「pict (色を付ける)」人種とラテン語で呼んでいた。ピクト人はカレドニア人の子孫で

に抗争し、2民族が共同し一民族に対抗する民族間あるいは同民族間での抗争の時代であった。4民族の中で、スコット人がスコットランドという名称を定着させる中心的な民族になった。属領ブリタニア州（現在のイングランド）を支配していたローマ人（ローマ帝国）は、121年から122年にかけて、皇帝ハドリアヌス(Publius Aelius Hadrianus)（在位117年-138年）の命を受けて、カレドニア地域に居住していたピクト族の南侵<sup>8</sup>を阻止するために、「ブリタニア版万里の長城」（ハドリアン・ウォール<sup>9</sup>）を築城した。この長城は、ソルウェイ湾からタイン川（River Tyne）の東海岸近くまでに横断する長城であった。この長城の築城にも拘わらず、ピクト人の侵入は繰り返された。208年にローマの武将セヴィルス(Lucius Septimius Severus)（皇帝在位193年-211年）は、カレドニア北部のマリ湾まで海路で北上し、ピクト族領に侵攻したが、しかし、ゲリラ戦による抵抗にあって、戦果を上げることなく、イーボラカム（現在のヨーク）に引き上げ、そこで病没した。それ以降、カレドニアにローマ軍が侵攻することなく、ハドリアン・ウォールを境に南は南、北は北での統治が進められていった。

5世紀<sup>10</sup>頃には、4部族が部族王国を形成し割拠していたと考えられる。その部族の分布図であるが、現在のスコットランドの北部および中部にかけてのハイランド地域にはケルト系ピクト人が居住し、その南西部のストラスクライド地域にはケルト系ブリトン人、その南部中央のロージアン地域ならびに南東部のノーサンブリア地域にはゲルマン系アングル人、そしてその西部のアイランド寄りのギャロウェイ地域にはケルト系スコット人が居住していた。ローマ人がカレドニアと呼び、ピクト人がオールバと呼んだ地域である、ブリタニア島の北端に位置するケイスネスから南はフォース湾に至るまでの地域には、ピクト人が居住していた。

あると思われる。

ピクト人は、ローマ人がカレドニア（古アイルランド語で森を意味する）と呼んでいた地域に居住していた。ピクト人は、その地域をオールバ（アイルランド語でブリトンを意味する）と呼んでいた。ピクト語はブリトン人が使用したブリトン語に関連している。

<sup>7</sup> アングル人は、ドイツのリューベック、キール周辺に定住していた古コバルト族の係累であると言われていた。5世紀にブリトン島に上陸し、ノーサンブリア王国、マーシア王国の王族はアングル人である。9世紀にウェセックス王国がブリテン島中南部地域を統一し、その統一した領土が後にアングルの土地と呼ばれた。これが「イングランド」の語源である。それは、「アングル人の土地」という意味である。

<sup>8</sup> ブリタニア総督ユリウス・アグリコラ（37年生-93年没）は、84年のグラビアンズ山の戦いで勝利し、ローマの支配を「ハイランド線」まで押し上げたが、彼は退却の命令により、アグリコラは不本意ながら退却した。

<sup>9</sup> この城は、ローマ皇帝ハドリアヌスによって、度々侵入するピクト軍の侵入を阻止するために築城された。またその20年後には、ブリタニア総督ウルピカスによって、スコットランド中部に防塁が築かれた。クライド川の河口に臨む西岸のオールド・キルバトリクからフォース湾に臨むカリドンの東部にかけての長城が築かれた。当時の皇帝の名を採って、「アントナイン・ウォール」と呼ばれた。これは石造りでなかったために、その姿を今日殆ど見ることはできない。

<sup>10</sup> 紀元1世紀には、ブリテン島の南部には幾つかの王国がうまれていた。それらはブリテン丘砦（部族全体の避難所や首長の居住に使用されたと思われる）が残っている。

## 第2節 スコット人のアイルランドから侵攻

スコット人のルーツは、現在のアイルランド北部のアントゥリム (Antrim) を中心とした地域にあったダル・リアダ王国であると、言われている。5世紀ごろ、ファーガス2世(ファーガス・モー・マック・エルク) (501年ごろ没?) は、2人の弟あるいは息子を連れ、キンタイヤ半島に上陸し、彼自身はキンタイヤ半島を支配した。2人の弟あるいは息子(ロアルンとオエンガス)は、オウバン (Oban) とジュアラ (Jura) 半島をそれぞれ支配した。

その後、ファーガス2世は、キンタイヤ半島のアッド川(Add River)ほとりのドナド(Dunadd)にダル・リアダ王朝<sup>11</sup>を樹立し、初代国王になった。この王国樹立は、先住民であるピクト族との間に、激しい抗争を引き起こした。その後の多くのダル・リアダ王朝の歴代国王は、ピクト人との抗争とによって、落命していたことから、スコット人とピクト人の抗争が尋常ではなかったことが伺い知れる。

スコット人の勢力拡大、および、ピクト人とスコット人との間での勢力争いの緩和に大きく貢献したのがキリスト教<sup>12</sup>であった。同じ宗教を信じるものとして、時には共同してブリトン人やスカンジナビア人の侵入に協力し助け合い対抗した。そうではあっても、両民族の協力関係は、各地で両民族の対立・抗争を続けながら、また4民族の入り乱れた抗争・和解・抗争を繰り返しながら、徐々に広がっていった。特に、北の強力な海賊スカンジナビア人に対抗するためには、どうしてもその共通の北方の敵に協力して対応する必要があった。スコット人とピクト人の政略結婚あるいは混血を経て、両民族の連携・合併が進んだと思われる。

## 第3節 ダル・リアダ王国と連合王国

9世紀の初め頃、アルピン(834年没)がダル・リアダ王国の王位<sup>13</sup>にあったころ、彼の母はピクトのオールバ王の娘<sup>14</sup>であったが、オールバ(アルバ)王国のアンウィン王(Unwin King)が早世し、世継ぎが途絶えた。アルピン王は、母の権利によって、オールバ王国の王位継承を要求した。しかし、ピクト人には王位継承に関して母系継承制度がなかったため、オールバ王ならびにピクト人はその主張に激怒し、834年にアルピンを拘束し、南西部のギャラウェ

<sup>11</sup> ダル・リアダ王朝は、その後、アルピン王家が誕生する(839年)まで続いた。

<sup>12</sup> スコットランドへのキリスト教の布教は5世紀ごろに始まり、ブリトン人の聖ニニアンはスコットランド南西部ならびに北部に布教したことから始まったと、言われている。その後、6世紀には、アイルランドの聖オラーン、次に6世紀後半以降には、アイルランドから聖モルア、聖エイダン、聖カスパートらがスコットランドに渡来し、布教を行った。その中の一人が聖コラムバであった。

<sup>13</sup> ダル・リアダ王朝26代目の国王であった、と言われている。

<sup>14</sup> アルピンの母の名は、ファーグスティアナであった、と言われている。

イで処刑した。直ちにマクアルピン (MacIpin) が王位を継承し、839年(あるいは841年)、ケニス1世としてダル・リアダ王国の王位に就いた。彼は、846年にオールバ王国に決戦を挑み、それに大勝した。ケニス1世マクアルピン(在位839年/841年-859年)<sup>15</sup>は、オールバ(アルバ)王国の王位も継承し、ダル・リアダ王国(スコット族の王国)とオールバ(アルバ)王国(ピクト族の王国)の連合王国(国名オールバ王国)を建国した。

この王国が、統一スコットランド王国<sup>16</sup>の基礎であったと考えられる。ケニス1世は、その国名としてオールバ王国を引き継ぎ、ダル・リアダ王国の宮廷をオーバンの北のダンスタフニッジ(Dunstaffnage)からピクト族のオールバ王国の中心であったスクーン(Scone)に移した。都として選んだスクーンに「運命の石」<sup>17</sup>を移し、この石の上でダルリアダ・オールバ王として戴冠式を挙げた。ダルリアダ・オールバ王国のキリスト教信仰の中心地をダンケルド(Dunkeld)とした。内ヘブリディーズ諸島のアイオナ島(Iona Island)に埋葬されていた聖コラムバ(521年-597年)<sup>18</sup>の遺骨を政治の中心地スクーンの北西のテイ川(River Tay)に臨むダンケルドに移す。この移転は、ピクト族の地域にじわじわキリスト教が伝わり、祭政の両面からスコットとピクトの両族の融和統合を進展させた。

その連合国は、エディンバラを支配に入れ、サクソンに奪われていた国境地帯ノーサンバーランドにも攻め入り、南部ロージアンを完全では無いが一応勢力下に置くことに成功した(973年)。ダル・リアダ王国から連合王国の統治地域はスコットランドの中央部分であった。しかし、ケニス2世(在位971年-995年)は、スコットランド中央部分の統治に努めたが、道半ばにして、豪族の夫人<sup>19</sup>が差し向けた刺客にアバディーン付近で惨殺された<sup>20</sup>。

マルカム2世(在位1005年?-1034年)<sup>21</sup>は、力による統治に乗り出した。ロージアンなら

<sup>15</sup> アルピン王家の開祖であり、統一スコットランドの基盤を築いた人物でもある。

<sup>16</sup> 1018年以降、この王国がスコウシア王国と呼ばれる連合国の基盤となった。ケニス1世の頃は、北部は豪族の支配下にあり、南部のロージアンは敵国(アングル族の国)であった。

<sup>17</sup> ダル・リアダ王が戴冠の座として使用された。聖ヤコブの頭に載せたものをアイルランドのダル・リアダに運んだ「聖なる石」との伝承あるものである。

<sup>18</sup> アイルランド北部地方のアルスターの部族長の子として生まれ、キリスト教の教えを受けて育った。布教の地域としてスコットランドを選び、内ヘブリディーズ諸島のアイオナ島に渡り、修道院を建設した。コバルトの布教は、すでにキリスト教徒であったスコット族と新しくキリスト教徒になるピクト族を同じキリスト教徒であることから融和させ、スコットとピクトが共同して異国からの侵入者に対抗させる力を与えることになったと予測させる。

<sup>19</sup> この夫人は、豪族マーンズ領主の夫人フェネリアである。彼女の息子を殺害した恨みによる復讐であった。

<sup>20</sup> 12代目ケニス2世は前王(コリン, Colin)を殺害し、王位に就いた。そして第13代目の国王コンスタンティン4世(在位995年-997年)は、戦死し、第14代目の国王ケニス3世(在位997年-1005年)は、従兄弟のマルカム2世によって殺害された。

<sup>21</sup> ケニス2世の長男で、性格は、機敏、不撓不屈さらには残虐冷酷であった。ケニス2世が殺害された後、王位は、分家のコンスタンティン4世(在位995年-997年)、14代国王は従兄弟のケニス3世に継承された。マルカム2世は、王位継承方法を母系継承システムのタニストリーと呼ばれる方法から長子継承へと変え



びにストラスクライドの併合と領土拡大が成し遂げられた。最初に、アングル族の国ロージアンLothianの平定に乗り出し、ロージアンをスコットランド領に併合した(1018年)。次に、ストラスクライドのブリトン王が継承者のいないままに他界したので、マルカム2世は、孫のダンカンDuncan(ダンカン1世(在位1034年-1040年))をストラスクライド王の後継者にすることに成功し、ロージアン併合によってスコット、ピクト、そしてアングルの3民族を統合する連合王国を作り上げ、ブリトン族を加えた4部族に君臨した。その国名は、オールバ王国からスコウシア王国と呼ばれるようになった。ダンカン1世<sup>22</sup>は、スコットランド王とストラスクライド王を兼務した。その支配版図では、イングランドとの境界は現在のスコットランドとイングランドを分ける境界線に近くなった。「スコットランド人」としての領土意識、国家意識は、この境界線を基準にしている。現在の国境線は13世紀に決定されるが、イングランドとスコットランドの領土意識は、ダンカン1世治世にほぼ確立していたと考えられる。

## 第4節 デイヴィッド1世と統一王国の整備

### 4.1 エドガー王の平和外交と領土割譲

マルカム3世(Malcolm III)(在位1058年-1093年)の子であるエドガー王(在位1097年-1107年)は、「イングランド王の臣従者」を宣言<sup>23</sup>し、南部ロージアンにアングル人やノルマン人の進入を許し、またスカンジナビア人の既得権益を許し、ヘブリディーズ諸島やキンタイヤを失い、それをノルウェー領にしてしまった。エドガー王の弟のアレグザンダー1世(在位1107年-1124年)の治世時には、南部のロージアン、ストラスクライドの統治は弟のデイヴィッド(後のデイヴィッド1世)に任せ、自身はフォース湾(Firth of Forth)から北部のスペイ川(River Spey)河口に至るまでの中部、南部の統治をし、西部や北部のロスやマリなどは直接統治せずに領主に任せた。

マルカム3世とサクソン王家出身のマーガレット王妃の子であり、アレグザンダー1世の

---

る道を開いた。

<sup>22</sup> ダンカン1世は、マルカム2世の長女ベソックとアサル領主でダンケルドの大修道院長であったクリナンとの間に生まれた。ダンカン1世の血筋に繋がる歴代の国王は、クリナンの地位であるアサル領主の名称を採って「アサル王家」(アサル王家は1034年から1290年までの156年間であった。ただし、マクベス王とルーラッハ王は、アサル王家には属さない。)と呼ばれる。ダンカン1世は、1040年に、ディングウォールの西隣のストラスぺファー(Strathpeffer)で、従兄弟のマクベス(Macbeth)(在位1040年-1057年)によって殺害された。このマクベスは、シェイクスピアの悲劇「マクベス」に取り上げられている人物である。マクベスは、マルカム2世の次女ドウナグとマリ領主のフィンレットとの間に生まれた、と言われている。マクベスの生地は、インヴァネスの北西クロマティー湾に臨むディングウォール(Dingwall)であった。

<sup>23</sup> スコットランドがイングランドに臣従することは、マルカム3世以来の方針であった。

弟であるデイヴィッド1世(在位1124年-1153年)<sup>24</sup>によってスコットランド王国の統治体制の整備がなされた。デイヴィッド1世もノルマン風の教育を受け、王位に就いたとき、彼は、すでにイングランド貴族の身分をもっており、イングランドのハンティンドン伯領およびノーサンプトン伯領を支配する貴族でもあった。彼の妃になったマティルダの母は、イングランド王ウィリアム1世(征服王ウィリアム)(在位1066年-1087年)の姪であった。

#### 4.2 デイヴィッド1世の封建的行政制度の整備

デイヴィッド1世は、父マルカム3世が手がけて、まだ実効性がでていなかった国王直属の官制の確立に力を注ぎ、王国に相応しい統治制度の確立に努めた。そのために、ノルマン出身の友人たちの多くをスコットランドに招き所領<sup>25</sup>を与え、彼の補佐役として要職<sup>26</sup>に登用した。スコットランドの諸制度をノルマン流(イングランド流)封建制度<sup>27</sup>に改革することに乗り出した。たとえば、中央政府官制の最高長官の職制として、歳入長官(大蔵大臣<sup>28</sup>)、国璽(こくじ)尚書(王の文書の記録や玉璽の保管)、最高司令官の3名を置き、この3名を加えた司教上席者を中央政府の最高責任者とし、国王の命令が直ちに実行されるように義務と権限を与えた。また中央政府の下部機構の実務官として、法務官や地方執行官(封建領主に派遣され、その砦に駐在し、その地域の司法、行政を司る)を任命し、中央政府の命令の実行や委任された司法、行政の執行に当たらせた。

<sup>24</sup> デイヴィッド1世もアレグザンダー1世と同様にイングランドの宮廷でノルマン風の教育を受けた。そこで教養豊かな青年に成長し、1124年に王位に就いた。

<sup>25</sup> ロバート・ドゥ・ブルースやウォルター・フィッツランドやバーナード・ドゥ・ベイリユールなどはアナンデイル(Annandale)などの南部に所領を与えられている。

<sup>26</sup> フランス語を話す新貴族社会を形成し、土着のスコットランド貴族社会に影響を及ぼすことを計画した。新貴族社会は後に土着の貴族社会と婚姻関係を通じて、同化していった。

<sup>27</sup> スコットランド王デイヴィッド1世はイングランドの統治制度を取り入れたと考えられる。イングランドの宮廷生活は、イングランドのヘンリー1世の時代に、整備された、と思われる。封建制度は、主人と従者を土地とその見返りで結びつける制度であった。この制度は征服王と封臣との間の関係であり、征服王ウィリアム1世は、提供する封土に対する見返りとして、王の軍隊に提供すべき騎士の割当数を封臣に義務づけた。これは、自由人に課された軍役義務であった。毎年40日の城砦守備が自由人の軍役義務であった。アングロ・サクソンの時代から受け継がれた自由人の三大義務は、橋梁建設義務、城砦都市建設義務、軍役義務であった。征服王以降のノルマン朝は、アングロ・サクソン時代の公的義務組織は受け継ぎながらも、変化を加えた。ノルマン朝は城をイングランドにもたらし、城警備の義務を公的義務に加えた。

<sup>28</sup> イングランドでは、1110年頃に財務府が、ロジャー・バイコットによって確立された。初代財務府長官は甥のナイジェルであった。財務府は、年2回州長官の会計報告を検査するために開かれた。財務府は、王権の経常的収入を扱った。その経常収入には、州内の王領荘園や州長官の活動拠点の州都が支払う定額の金銭が含まれた。王権の収入のすべてが会計報告された訳ではなかった。特権の授与や結婚の許可を得るために王に直接的に支払う金銭は、王の直接の収入となり、これは「寝所部」の収入であった。

### 4.3 デイヴィッド1世の経済改革と宗教や文化面での改革

デイヴィッド1世は経済面においても改革を行った。彼は、イングランドの鑄造貨幣を真似てスコットランド史上最初のコインを鑄造<sup>29</sup>し、外国との貿易を奨励し、国王の勅書状を与えられた「自由都市」の開設に着手した。その勅書状を与え、通行税を免除し、定期市の開催権、市場の開設権、特定産物の独占的な販売権等の諸権利をその都市<sup>30</sup>に与えた。ノルマンの征服王ウィリアムや赤顔王ウィリアム(ウィリアム2世)と同様に、領地に要塞であり同時に植民定住地<sup>31</sup>であった城を築き、その周りに新しい都市を発展させた。

宗教面での改革についても言及しておこう。司教区をグラスゴウ(Glasgow)、東部のブリーチン(Brechin)、中部のダンブレイン(Dunblane)、北部のケイスネスおよびロスそして東北部のアバディーン(Aberdeen)に新設した。南東部のケルソウ(Kelso)、ドライバラ(Dryburgh)、メルローズ(Melrose)に教会や修道院を新設した。デイヴィッド1世はその領地に教会と修道院を建設した。デイヴィッド1世治世下で、スコットランドは大きく様変わりをした。スコットランドの中部や南部では、古い慣習や伝統が一扫され、貴族はフランス語を話し、農民層は、スコットランド語化した英語(Inglis)として統一された語を使い、また中部を超えて北部にも<sup>32</sup>封建制度が行き渡り始め、自由都市を中心に産業が発達し、教区も組織化され、信仰の普及も進んだ。しかし、北部ハイランドでは、氏族制度が続き、西部の沿岸地域や島嶼地域はノルウェーに臣従する部族で占められていた。デイヴィッド1世は、イングランド王国の王位継承<sup>33</sup>をめぐる内戦に乗じて、カーライルやニューカースルを中心とするノーサン

<sup>29</sup> デイヴィッド1世は、マティルダとスティーヴンとの間の王位継承争いに乗じて、イングランド領ニューキャッスル(Newcastle)とカーライル(Carlisle)を占領したとき、貨幣鑄造所からヒントを得て貨幣(スコットランド史上初のコイン)を鑄造した。このことは、スコットランド経済が貨幣の流通を可能にするほどに発展してきたことを意味する。また貨幣流通が可能になるためには、中央政府の統制が充実していることを必要とする。

スティーヴン治世において、イングランド南東部ではスティーヴン王の貨幣、その西部ではグロスター伯の貨幣、プリストル、カーディフではマティルダ貨幣が発行された。これは、スティーヴン王の統制力が南東部に限られていたことを意味する、と考えられる。

<sup>30</sup> たとえば、エディンバラ(Edinburgh)、スターリング(Stirling)、パース、ダンファームリン(Dunfermline)などの都市であった。

<sup>31</sup> 植民定住政策は、ノルマン朝が積極的にイングランドで展開させた政策である。デイヴィッド1世もその政策を取り入れ、経済活動を積極的に展開した。

<sup>32</sup> フォート湾以北(スターリングを境にして)ではケルト語が使用されていたと思われる。

<sup>33</sup> イングランド王ヘンリー1世(Henry I)(在位1100年-1135年)の後を継いだスティーヴン王(Stephen)(在位1135年-1154年)と、イングランド王ヘンリー1世とデイヴィッド1世の妹のマティルダ(Matilda of Scotland)(1080年生-1118年没)との間の子であるマティルダ(Matilda the Empress)(1102年生-1167年没)との間に王位継承の争いがあった。ヘンリー1世はマティルダを王の継承者としたが、ロンドン市民である聖職者と民衆はスティーヴンを選んだ。王位継承は、イングランドに基盤を持つスティーヴンに対して、フランスのアンジュー伯領のマティルダとマティルダの腹違いの兄グロスター伯ロバートとが協力して戦われた。ウォーリンフォード条約でマティルダの息子ヘンリーが王位を継承することで和解した。

バーランド (Northumberland) やカンバーランド (Cumberland) を支配権に収めた。

## 第5節 領土拡張と王権の伸張

### 5.1 イングランドへの臣従とケイネスおよびサザーランドの併合

デイヴィッド1世<sup>34</sup>の孫のマルカム4世(在位1153年-1165年)は、ハンティンドン・ノーサンブトン伯領を与えられたことの代わりに、ノーサンバーランドの支配権をイングランド王ヘンリー2世に奪い取られた(1157年)。ヘンリー2世は、スコットランド王を自分の宮廷に引き入れ、弟ジェフロワやスティーヴン王(King of Stephen)(在位1135年-1154年)の子ウィリアムと同様に、自分の領土の一体性維持の責務(封土と騎士奉仕役務関係の封建制度)を担う存在として、スコットランド王マルカム4世を見なしていた。1160年頃にはギャラウェイをスコットランド領に組み込んでいた。

デイヴィッド1世の孫になるウィリアム1世<sup>35</sup>(在位1165年-1214年)は、兄マルカム4世の治世下で失ったノーサンバーランドを取り戻すために、ヘンリー2世親子の相続をめぐる問題<sup>36</sup>に端を発したイングランドの反乱(主にイングランドのミッドランド地方の貴族(レスター伯, チェスター伯, ダービー伯, ハンティンドン伯デイヴィッド)の反乱)に乗じてイングランド王ヘンリー2世(在位1154年-1189年)<sup>37</sup>に戦いを挑むが、しかし、ノーサンバー

---

それが後のヘンリー2世である。

スティーヴンは、マティルダの叔父であるデイヴィッド1世に対して迅速に対応し、1236年にハンティンドン伯領がデイヴィッド1世の子のヘンリーに与えられた。またデイヴィッド1世は、隣国のその王位継承騒動を巧みに利用して、イングランド北部に侵攻したが、1138年のサースク近くで戦い、すなわち「旗の戦い」で大敗した。しかし、スティーヴン王との交渉で、ノーサンバーランドやカンバーランドの支配権を手にした。

<sup>34</sup> デイヴィッド1世とマティルダの間には、2男2女が生まれた。次男ヘンリーの長男マルカム4世がデイヴィッドの後継者になった。マルカム4世は11歳で王位に就いたが、ノルウェー王エイスタイン2世(Eystein II)(在位1136年?-1157年)によってアバディーンが襲われ、また南西部を押さえていたアーガイル領主サマーレッドによってグラスゴウが襲われ、略奪された。北部マリなどのハイランド地域の豪族が中央政府に反旗を翻したが、この北部の反乱をノルマン出身の貴族に討たせている最中に23歳で夭折した。

<sup>35</sup> イングランド王ヘンリー1世の庶子コンスタンスの娘アーマンガード(Ermengarde)(1233年没)と結婚し、1男3女が生まれた。長男がアレグザンダー2世であった。

<sup>36</sup> ヘンリー2世が末子ジョンにロワール地方の城を与える約束をしたが、アンジュ伯領の相続人であったヘンリー小王(ヘンリー2世の長男)がそれを拒否した。ジェフリーおよびリチャード(ヘンリー2世の次男と3男)は共にフランスに亡命し、ルイ7世から亡命王の待遇を受けた。

<sup>37</sup> イングランド王ヘンリー2世は、妻アリエノールの相続を通してフランス西部(ポワトゥー伯領とガスコーニュ公領など)の広大な領土を加え、イングランド北部のニューカースルから南フランスのボルドーまでの直線距離で700マイルの領土を有していた。プランタジエット王家(House of Plantagenet)はヘンリー2世より始まる。同王の父アンジュ伯ジョアフリーが好んでエニシダ(planta genet)の小枝を帽子に挿

ランドのアニクの戦い (Battle of Alnwick) でヘンリー 2 世軍に破れ、捕虜とされフランスに護送された (1174 年)。フランスのノルマンディーのファレーズ (Falaise) における協定において、スコットランドは、イングランドに完全に臣従すること、スコットランドの教会をイングランドの大司教の管轄下に入ること、イングランド軍のスコットランド南部常駐などの条件を押しつけられた。

アレグザンダー 2 世 (Alexander II) (在位 1214 年-1249 年) は、イングランド王ヘンリー 3 世 (Henry III) (在位 1216 年-1272 年) との間でヨーク条約を締結し、スコットランドとイングランドとの国境を東部のトゥイード川と西部のソルウェイ湾を結ぶことで同意した。現在の国境線の始まりであった。南部でのイングランドとの関係が安泰になったので、アレグザンダー 2 世は、内政の充実に乗り出し、デイヴィッド 1 世が先駆けていた行政組織を全国に行き渡るようにし、またウィリアム 1 世のとき (1202 年) に配下に入れた北部のマリ地域や最北端のケイスネスやサザーランドでの反乱を抑えて、その地域もスコットランド王国の支配下に入れ、封建制度の北部浸透の道を開いた。

## 5.2 ヘブリディーズ諸島、オークニ諸島とシェトランド諸島を領土に追加

南部でのイングランド王国とのいざこざから解放され、国内の治安を保ったアレグザンダー 3 世 (在位 1249 年-1286 年) は、北方の海賊ノルウェー軍の駆逐に取りかかった。彼は、1261 年に、ヘブリディーズ諸島の奪回に成功する。1263 年には、クライド湾 (Firth of Clyde) に侵攻してきたノルウェー王ホーコン 4 世 (Håkon IV) (在位 1217 年-1263 年) が率いるノルウェー軍を迎え撃ち、ラークズの戦い<sup>38</sup> (Battle of Largs) でアレグザンダー 3 世は、ノルウェー軍に壊滅的な打撃を与え大勝し、ノルウェー王マグヌス 6 世 (在位 1257 年-1280 年、父ホーコンの存命中は共同統治) とパースで平和条約を結び、1266 年にヘブリディーズ諸島を正式にスコットランド領にした。

ジェイムズ 3 世 (在位 1460 年-1488 年) の摂政会議の一員であったボイド卿ロバート (Robert Boyd, Earl of Boyd) (1469 年没?) は、国王をエディンバラ城に取り込み、自ら国王警護長官を名乗り、王室財務長官につき、王権を壟断したが、その彼の功績に、ジェイムズ 3 世の王妃としてデンマーク王国の女王マーガレットを迎えたことを入れることができる。当時

---

して戦場に臨んだことから、王家の名前を付けている。プラントジェット王家はヘンリー 2 世からリチャード 2 世までの 8 代の王家である。

<sup>38</sup> ノルウェー王ホーコン 4 世が率いるノルウェー軍に大勝した。この大勝は、あざみの「ラークズ伝説」を生み出した。あざみは、現在、スコットランドの紋章である。ラークズの戦いであざみがスコットランドに勝利をもたらしたことにより、この伝説が生まれた。ノルウェー軍が夜陰に乗じてラークズの沿岸に上陸し、隠密裡にスコットランド陣営に接近し、素足の兵隊が「あざみ」を踏みつけて、大声を上げたことによりスコットランド軍が未然に奇襲をかわし、逆襲にでて勝利した。

結婚には多額の持参金が付きものであったが、スコットランドは手許不如意から現金を要求したが、デンマーク王クリスティアン1世も手許不如意から後に現金を送る代わりに、オークニ諸島、シェトランド諸島を持参金とした。このことによって、スコットランドの北部あるいは西部海岸を荒らした海賊の根拠地あるいは中継地がスコットランド領になったことは現金では賄えない大きな収穫であった。

この領土拡大をバネにして、ジェイムズ4世、ジェイムズ5世はスコットランド王の権力伸長を進めることができた。ジェイムズ3世の長男ジェイムズは、1488年6月26日にジェイムズ4世(在位1488年-1513年)として、戴冠した。そのときジェイムズ4世は15歳の若さであった。ジェイムズ4世の一生は40年であったが、彼は、統治の決断力と文化的才能の両方を持ち備えた理想的な国王であった。特に、語学の天才であり、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ラテン語、各地の方言を含むゲール語に精通していた。彼は、画に描いた理想の男性であった。

スコットランドの国土の拡大とイングランドとの安定した関係の維持が、スコットランド王権の伸張を可能にした。その伸張をになった主要な国王が、ジェイムズ4世であった。もちろんジェイムズ1世やジェイムズ2世の努力もあったが、彼の個人的な素質があつてはじめてスコットランド王権の伸張が可能であった。

### 5.3 王権の伸張

ジェイムズ4世は、スコットランド王権を回復<sup>39</sup>させ、伸張させた国王であった。それは、一面では、彼の果敢な行動と先見性によっていた。このことを幾つかの観点から確認・検証してみよう。第一に、ジェイムズ4世の果敢な行動力による王権の回復と彼の人事の観点からである。スコットランド王権を侮っていた5代アンガス伯アーチボルド・ダグラス(Archibald Douglas, 5<sup>th</sup> Earl of Angus) (1449年生-1513年没)は、1491年、ヘンリー7世<sup>40</sup>(在位1485

<sup>39</sup> ソーキバーンで皇太子ジェイムズを擁してジェイムズ3世を抹殺した有力貴族は、論功行賞に預かることを当てにし、5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスは、摂政気取りで諸事を仕切り、またアーガイル伯コリン・キャンベル(Colin Campbell, 3<sup>rd</sup> Earl of Argyll) (1486年生-1529年没)は、イングランド大使、パトリック・ヘバーン(Patrick Hepburn, 1<sup>st</sup> Earl of Bothwell) (1508年没)は、海軍長官職とボスウェル伯爵になっていた。

<sup>40</sup> ヘンリー7世は、チューダー王家の開祖である。ヘンリー5世の王妃キャサリン・オブ・ヴァロア(Catherine of Valois) (1401年生-1437年没)は、ヘンリー5世の病死後(1422年)に、議会で反対されながらも、王太后付納戸係秘書官で一介の騎士程度の身分にすぎないウエールズ出身のオウェン・チューダー(Owen Tudor) (1400年生-1461年没)と再婚した。2人の間に、1430年、エドマンド(Edmund Tudor) (1430年生-1456年没)が生まれた。ヘンリー6世は、異父弟エドマンドをリッチモンド伯に叙爵し、全伯の最右翼とし、破格の待遇をした。このリッチモンド伯によって彼は、1455年、名門3代サマーセット公ジョン・ボーフォード(John Beaufort, 3<sup>rd</sup> Duke of Somerset) (1403年生-1444年没)の娘マーガレットを妻に迎えることができた。このマーガレットは、ランカスター公ジョン・オブ・ゴント(エドワー

年-1509年)と共に謀反を企てようとした。その謀反の情報を入手したジェイムズ4世は、迅速果敢な行動をとり、東ロージアンのアンガス伯の居城を包囲し、アンガス伯を閉じ込め、さらにアンガス伯の持ち城ロクスバラシャー(Roxbough Shire)のハーミティジ城(Hermitage Castle)を没収した。しかし、通例に反して、ジェイムズ4世はアンガス伯を叛逆罪で処罰することはなかった。また、中世の多くの王とは違い、ジェイムズ4世は没収した領地に代えて、他の領地をアンガス伯に与えた。その上、その後、アンガス伯を宰相に据えている。

第二に、ハイランド地方に対して王権を伸張させた観点からである。ジェイムズ4世は、氏族制度によって強く団結しているハイランドの首長たちを王権の下に置くための努力をした。それまでハイランド地方の隅々までには王権<sup>41</sup>は及んではいなかった。ジェイムズ4世が国王に就いた時には、州長官(シェリフ)は、既に氏族首長の命令執行機関<sup>42</sup>となり、ハイランド地域は氏族の独立国家のようであった。ジェイムズ4世は、ロス(Ross)伯ならびにイール卿ジョン・マクドナルド(John MacDonald, Lord of the Isles)(1434年生-1503年没)をめぐる内紛と反抗に乗じてハイランド地域での王権の伸張を図った。ジョン・マクドナル

---

ド3世の5男)の曾孫であった。

エドマンドとマーガレットの間に生まれたヘンリーが、後のヘンリー7世であった。彼は、彼の母マーガレットによってランカスター家の血筋に繋がっていた。またエドワード3世の5男ジョン・オブ・ゴント(John of Gaunt)(1340年生-1399年没)に繋がる血筋であったので、本来であれば王位継承権を持つのであるが、王位継承権から排除されていた。サマーセット公ジョン・ボーフォードは、ジョン・ゴントと第3番目の妃キャサリン・スウィンフォード(Catherine Swynford)(1350年生-1403年没)との間に生まれていたが、2人が正式に結婚する前に生まれていた。ジョン・ボーフォードは、庶子であったが、2人が正式に結婚し、嫡出子と認められたが、ヘンリー4世によって、王位継承権から排除されていた。リッチモンド伯の母マーガレットには王位継承権はなかった。当然に、その子孫であるヘンリー7世にも王位継承権はなかったため、ヘンリー4世と同様に、彼は王位篡奪者であった。1485年8月、ボズワースの戦いでリチャード3世を打ち破り、実力でヘンリー7世の王位を奪取した。

<sup>41</sup> ハイランド地方への王権の伸張は、デイヴィッド1世、アレグザンダー2世ならびにアレグザンダー3世によって進められた。デイヴィッド1世が封建制度のハイランド地方への浸透の足場を築いたが、この時、ハイランドは氏族制度の下にあり、ノルウェーに臣従していた。アレグザンダー2世は、デイヴィッド1世が築いた足場を踏み台にし、王権のハイランドの北部に浸透させた。マリ、ケイスネス、サザランドに王権の浸透をもたらした。しかし、ハイランドのアーガイル地域では、依然として、イール領主などはスコットランド王権に反抗していた。アレグザンダー3世は、ノルウェーからヘブリディーズ諸島を奪回し、スコットランドの西部を王権の支配下に置く準備を果たした。依然として、イール卿は独立していた。アレグザンダー3世(正確には、マーガレット女王)以降、スコットランドはイングランド(エドワード1世およびエドワード3世治世のイングランド)との間で、スコットランド南部(ノーサンバーランド地域あるいはカンバーランド地域)の支配をめぐる争いのため、あるいは、フランス王権とイングランド王権のフランス王の継承に絡む内紛に係わりずらされたため、スコットランドの内政あるいはハイランド地方に対する王権による統制は遅れていた。

<sup>42</sup> デイヴィッド1世以来、ハイランドの地方の出先機関にシェリフ(州長官)が任命させ、置かれていたが、スコットランドの王権の目が南部と中部に釘付けになったところから、シェリフは任命制から相続制へと変化した。これは、シェリフが国家の出先機関であるにも拘わらず、王権の及ばない機関になっていたことを意味する。

ドが、9代ダグラス伯ジェイムズ (Jame Douglas, 9<sup>th</sup> Earl of Douglas) (1426年生-1488年没) と共に、1462年にエドワード4世と結んだウエストミンスター・アードトーニッシュ協定 (Treaty of Westminster-Ardtornish) の反逆行為が尾を引き、1475年、彼は、ロス伯を召し上げられた。これを不満とするジョンの庶子アングス・オグ (Aonghas Óg) (1490年没) は、父と共にスコットランド国王に反抗し、軍を起こした。このために、西部ハイランドでは、1480年から1490年までマクドナルド対マクロード (MacLeod), マッケンジー (Mackenzie) の氏族間の抗争が続くが、それはアングス・オグの殺害で終結した。しかし、翌年、ジョンの甥のアレグザンダーがロス伯位の復権を要求して立ち上り、イール卿ジョン自身も反乱に加わり、甥のアレグザンダーがインヴァネスの王城を占領したとき、マッケンジー氏族の領地が荒らされたために、マッケンジー氏族は総攻撃をし、1493年、アレグザンダーを大敗させた。またジョン自身も王軍に降伏し、イール卿位は剝奪され、王権に含まれた。ジョンは、レンフルシャー (Renfrew Shire) のペイズリー・アベイ (Paisley Abbey) にて年金で余生を送った。西ハイランドの名門氏族マクドナルドは、ロス伯を失ったばかりではなく、イール卿位<sup>43</sup>も失った。

ジェイムズ4世は、有力氏族であったイール卿を押さえたことに自信をつけ、ハイランド地方の氏族を訪れ、新しく州長官を置く交渉をした。徴税権や裁判権などの特権を持って、容易に応じなかった氏族の首長を語学の天才であったジェイムズ4世は、ゲール語を使い説得に当たった。これによって、ジェイムズ4世はハイランダーの気持ちをつかんだと思われる。その一例であるが、国王直属の官軍を創設したとき、艦隊の最初の艦長を引き受けたサー・アンドリュー・ウッド、アンドリュー・バートン、ロバート・バートンなどはハイランダーであったことから知る事ができる。

第三に、ジェイムズ4世の先見性である。ジェイムズ4世は、当時のヨーロッパ情勢から海軍力の増強を感じ取り、21門の大砲を装備したマーガレット号に加え、戦艦グレート・マイケル号を建造した。これは、全長約70メートル、300門の大砲を持ち、乗員300人で1,000人の軍隊を移送できた。1506年から4年間の年月をかけて建造したヨーロッパで最大級の軍艦であった。これによって、北の小国というスコットランドのイメージを大きく変えた。

第四に、文化面での治績である。ジェイムズ4世は、上で述べ来たように、優れた統治能力と並はずれた人間性を持っていた。彼は、果敢ではあったが、信仰心が厚く・深く、臣下を冷酷に処刑することはなく、その臣下の能力を最大限に生かす統治を行った。彼は、語学の天才と言われ、音楽、スポーツ、狩猟、金属細工にまで秀でた人物であった。彼は、

<sup>43</sup> これ以降、イール卿位は、王権に属し、皇太子の資格となった。現皇太子チャールズは、このイール卿の資格を持っている。



前王ジェイムズ3世によって開かれたルネッサンスの扉から中に入り、各部屋にスコットランド文化の花を咲かせた。前王が登用した文化人に活躍の場を与えた。文学では、ロバート・ヘンリスン (Robert Henryson) (1430年生?-1506年没?) の作品「クレイセイドの遺言」、詩人のウィリアム・ダンバー (William Dunbar) (1465年生?-1530年没) の作品「あざみとばら」、前王の時から活躍していたガーウィン・ダグラス (Gawin Douglas) (1474年生-1523年没) やブライド・ハリ (Blind Harry) (1470年生) がよく知られている。また、1495年には、スコットランド3番目の大学となるアバディーンにキングス・カレッジを創設した。海外にも知られる文学作品の花が咲いた時代は、スコットランド最初の印刷の開始された時期と重なり合う。アントウロウ・マイラー (Andrew Myllar) (1503年-1508年の間活躍) がウォルター・チェプマン (Walter Chepman) (1473年生-1538年没) の協力を得て、エディンバラで詩集を印刷したのがその始まりであった。

外交政策の失敗・不手際がジェイムズ4世の寿命を短くした。孤立するフランスとの同盟関係の維持がその原因であった。ジェイムズ4世がマーガレット・テューダー<sup>44</sup> (Margaret Tudor) (1489年生-1541年没) と結婚したころ、フランス国王はルイ12世(在位1498年-1515年)、イングランドの国王がヘンリー7世からヘンリー8世<sup>45</sup> (Henry VIII) (在位1509年-1547年) に変わった頃であった。マーガレット・テューダーがヘンリー8世の妹であったので、ジェイムズ4世はヘンリー8世の義弟であった。ジェイムズ4世は、フランスとイングランドを和解させることができるのは、ヘンリー8世の義弟でフランスとの同盟国であるスコットランド王しかいないと真摯に考えた。

フランスは、神聖同盟国からの総攻撃に晒され、ジェイムズ4世に応援の要請をしてきた。ヘンリー8世は、ジェイムズ4世のフランス出兵制止要請を無視し、1513年にフランスに渡った。サリー伯トマス・ハワード (Thomas Howard, Earl of Surrey) (1443年生-1524年没) 旗下の26,000人のイングランド軍がスコットランドに北進してきた。これに対しジェイムズ

<sup>44</sup> 1502年に結婚したとき、マーガレットは14歳であった。2人の間に、3男2女が生まれるが、3男以外は全て1歳未満で死んだ。マーガレットは、ジェイムズ4世が死んだ後、1514年、6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚した。イングランド王エリザベス女王が死んだ後に、イングランド国王に迎え入れられたスコットランド王ジェイムズ6世は、母系(メアリー女王)からも父系(ダーリン卿はマーガレットとアンガス伯の孫であった)からもマーガレット・テューダーの曾孫であったので、テューダー家の血を継ぐものであった。故に、彼がイングランド王に迎えられた。マーガレット・テューダー王妃は、1541年、パースのメスバアン城で生涯を閉じた。

<sup>45</sup> 彼は、ヘンリー7世の播いた新しい王政の種を育てた国王であった。ヘンリー8世は、ラテン語、フランス語、そしてスペイン語に通じ、1521年には、マルティン・ルター (Martin Luther) (1483年生-1546年没) を批判する著作「Assertio Septem Sacramentorum」を発表し、法皇レオ10世から信仰の擁護者の賛辞を受けた。人文主義者 エラスムス (Desiderius Erasmus) (1466年生-1536年没) は、ヘンリー8世を高く評価した。

4世が全土に召集を呼びかけると、多くのハイランド氏族首長も手勢を連れて駆けつけ、4万人のスコットランド軍が集まった。ジェームズ4世は、コールドスゥルム(Coldstream)でイウード川を渡り、ノーラム(Norham)、フォード(Ford)などの4つの城を落とした。1513年9月、ノーラムの南のフロドゥン(Flodden)において、両軍は決戦した。その結果は、ジェームズ軍の完全な敗北であった<sup>46</sup>。ジェームズ4世は、この戦いで、敗死した。40歳であった。彼の遺体は行方不明になったままである。

ジェームズ4世の後を継いだのは3男ジェームズであり、ジェームズ5世(在位1513年-1542年)として即位した。そのとき彼は1歳と5か月であった。スコットランドの伝統となった摂政による統治が再開された。

摂政政治は、国政の不安の種であり、また有力貴族間の争いの温床でもあった。最初の摂政役には王母マーガレットが就いた。彼女は国政に全く不向きであったので、ジェームズ2世の孫で親英派であった初代アラン伯ジェームズ・ハミルトン (James Hamilton, 1<sup>st</sup> Earl of Arran) (1477年-1528年)と、親仏派のヒューム卿アレグザンダー・ヒューム (Alexander Home, Lord of Home) (1480年生-1539年没)が補佐役についた。摂政政治の不安定さは、摂政役の王母マーガレットが、親英派の6代アンガス伯アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas, 6<sup>th</sup> Earl of Angus) (1489年生?-1577年没)と再婚<sup>47</sup>したことであった。数少ない有力貴族の中でも親英派の6代アンガス伯との結婚には、摂政役を補佐していた重臣が反発し、彼女から摂政役を取り上げた。その代わりにフランスから呼び寄せた2代オルバニー公ジョン<sup>48</sup> (John Stewart, 2<sup>nd</sup> Duke of Albany) (1484年生-1536年没)を摂政にし、その不安定さを凌ごうとした。

オルバニー公は、王母マーガレットにスコットランドからの退去<sup>49</sup>を命じた。オルバニー公

<sup>46</sup> スコットランド軍の死者は1万人以上、その中には、伯卿、氏族の首長、聖職者もいた。スコットランド軍の大敗の原因は、野戦の戦闘方法に通じない寄せ集めの軍隊であったことであつた。よく組織され、野戦向きの武装をしたイングランドの軍隊に圧倒された。ジェームズ4世の大砲も野戦向きではなかった。それ対しイングランド軍の長槍は野戦向きであつた。

<sup>47</sup> ジェームズ4世の死後一年も経たない内に、1514年に6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚し、1515年にハーボトゥル城で娘マーガレットを産んだ。このマーガレットと4代レノックス伯マッシュ・ステュワート (Matthew Stewart, 4<sup>th</sup> Earl of Lennox) (1516年生-1571年没)との間に生まれたのがダーンリー卿ヘンリー (Henry Stuart, Lord Darnley) (1545年生-1567年没)である。このヘンリーとスコットランドのメアリー女王の間に生まれるのがジェームズ6世である。

<sup>48</sup> 彼は、初代オルバニー公アレグザンダーとアンヌ・ドゥ・ラ・トゥールの間生まれた。オルバニー公アレグザンダーは、ジェームズ2世の次男として生まれ、ジェームズ3世の弟であつた。彼には、スコットランド王位の継承権があつた。

<sup>49</sup> 彼女は、ノーサンバーランドのハーボトゥル城に移つた。王母マーガレット追放の彼の決断は、深い政治判断によるものではなく、単に彼がスコットランドとイングランドの関係を深く理解していないことやフランス語しか話さないことによつていた。

は、この采配で摂政としての人気を博し、議会によって王国第二の人物として宣言され、王位継承第一位者に公認された。しかし、彼は、王母マーガレットの補佐役であったヒューム卿などの不穏分子を処刑し、1517年にフランスに一時帰国し、それから4年間もスコットランドを留守したのであった。このことから、摂政オルバニー公のスコットランド現状に対する認識が浅かった<sup>50</sup>と判断される。他方、オルバニー公はスコットランド摂政として、フランス王フランソワ1世<sup>51</sup> (François I) (在位1515年-1547年)との間で、1517年に「古い同盟」を再確認するルーアン条約 (Treaty of Rouen) を結んだ。フランソワ1世は、依然として列強から孤立して、その2年前にミラノ<sup>52</sup>を押さえ、ハプスブルグ家 (House of Habsburg) と神聖ローマ皇帝の帝位を争う<sup>53</sup> 気概を抱いていたので、スコットランドとの同盟を確認する必要があった。彼は、ハプスブルグ家と手を握っていたヘンリー8世への牽制とも考えていたのかも知れない。オルバニー公の狙いはスコットランドのためではなく、強国のフランス王国に取り入れるためであった。

スコットランドにおいてアングス伯がヘンリー8世と陰謀を企む状況になったので、1521年にオルバニー公は、急いでスコットランドに戻った。6代アングス伯の陰謀は失敗したが、王母マーガレットは、弟のヘンリー8世と組むアングス伯と対立し、ハーボトゥル城を出て、オルバニー公の側に走った。フランスとの間で確認された同盟を具体化するために、1522年

<sup>50</sup> オルバニー公がスコットランドを留守にしている間、ダグラス伯一族とハミルトン一族によるエディンバラ市内での市街戦が起こった。1520年のこの争いは、「コウズウェイの掃」と呼ばれ、親英派ダグラス一族の親仏派のハミルトン一族に対する圧勝に終わった。スコットランドは全体として親英的になった。

<sup>51</sup> フランソワ1世は、幼少のころ人文学者の教育を受け、即位後、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) (1452年生-1519年没) やロッソ・フィオレンティーノ (Rosso Fiorentino) (1495年生-1540年没) らを保護した。またコレージュ・ド・フランスを設立し、ヘブライ語、古代ギリシャ語、数学の研究を促進させた。ルイ12世に世継ぎがいなかったため、その大甥のフランソワが王位を後継し、フランソワ1世として王位に就いた。フランソワが王太子のころルイ12世と王妃アンヌとの間に生まれた又従姉妹のクロードと結婚して、ブルターニュ公となり、1532年、ブルターニュ公国をフランスに併合した。

<sup>52</sup> 1500年、フランス王ルイ12世 (Louis XII) (在位1498年-1515年) は、スフォルツァ家 (House of Sforza) のイル・モーロを幽閉し、ミラノ公国 (Ducato di Milano) を征服した。だが、フランスのイタリア介入を嫌うローマ教皇は、神聖同盟を形成し、1513年、フランスをミラノから追放した。スフォルツァ家が復帰した。1515年、フランソワ1世は、ミラノに侵攻し、スフォルツァ家を追放し、ミラノを支配した。

<sup>53</sup> フランソワ1世は、皇帝マクシミリアン1世 (Maximilian I) (在位1493年-1519年) の死後、1519年にスペイン王カルロス1世 (Carlos I) (在位1516年-1556年) と神聖ローマ帝国の帝位を争い、惨敗する。カルロス1世は、神聖ローマ帝国の皇帝カール5世 (Karl V) (在位1516年-1556年) として帝位に就いた。これによって、フランスはハプスブルク家スペインとハプスブルク家ドイツに挿まれた。フランソワ1世とカール5世の覇権争いは延々と続いた。フランソワ1世は、ハプスブルク家の包囲網を向けるための活路をイタリア侵攻に見いだしていた。フランソワ1世は、1521年から1544年にかけて、イタリアを巡って皇帝カール5世と争った。これは、第1次イタリア戦争 (1521年-1526年)、第2次イタリア戦争 (1526年-1529年)、第3次イタリア戦争 (1536年-1539年)、そして第4次イタリア戦争 (1542年-1544年) として知られている。

と 1523 年の 2 回に亘って、フランス部隊の応援を得たスコットランド軍はイングランド領に侵攻した。しかし、スコットランド軍は国境にさしかかると、進軍を止めた。というのは、その戦いがスコットランドのためではなくフランスのためであると感じたからであった。1524 年、オルバニー公は、フランス軍を帰し、自身もフランスに行ったまま、再びスコットランドには戻らなかった。

ジェイムズ 5 世は、ロホメイバン(Lochmaben)からフォークランド宮殿(Falkland Palace)に帰り、あまりの悲痛のためにそのまま寝ついた。その一週間後に、ジェイムズ 5 世は、王妃マリー・ドゥ・ロレーヌ (Marrie de Lorraine) (1515 年生-1560 年没) が女の子を産んだとの知らせを受け取った。それから 6 日後の 12 月 14 日にその 30 年の生涯を閉じた<sup>54</sup>。ジェイムズ 5 世の死後直ちに、生後 6 日のメアリー (Queen of Mary) (在位 1542 年-1567 年) がスコットランド国王として即位<sup>55</sup>した。スコットランド王国は、アルピン家の最後のマーガレット女王と同じように、またもや嬰兒女王による船出となった。メアリー女王が生長するまで、摂政職が必要であった。最初に、ジェイムズ 2 世の曾孫で、プロテスタントの親英派であった 2 代アラン伯ジェイムズ・ハミルトン (James Hamilton, 2<sup>nd</sup> Earl of Arran) (1516 年生?-1575 年没) が摂政職に就いた<sup>56</sup>。メアリー女王はステュワート朝最後の女王であった。

## 第 6 節 「同君連合」から「グレートブリテン」

### 6.1 同君連合

ジェイムズ 6 世 (James VI) (在位 1567 年-1625 年) は、イングランド王ジェイムズ 1 世 (在位 1603 年-1625 年) として 1603 年 7 月 25 日ウエストミンスター・アベイで戴冠式を執り行った。ジェイムズ 6 世は「同君連合<sup>57</sup>」の国王になった。国王は同じ人物でありながら、

<sup>54</sup> ジェイムズ 5 世の治績の第一は、民事の中央裁判所である College of Justice をエディンバラに設けたことである。これは、現在のスコットランドの最高民事裁判所である court of session に繋がっている。その第二は、王国の財政を巧く遣り繰りして、教会の収入を王国の特別プロジェクトに使い、ホリーールドハウス (The Palace of Holyroodhouse)、リンリスゴウ宮殿 (Linlithgow Palace)、フォークランド宮殿の改築にあて、当時のルネッサンス建築の中でも優れたものをであった。スターリング・ヘッドと呼ばれる木彫の天井飾りは、現存するスコットランド・ルネッサンス調の最高の木彫である。ジェイムズ 5 世の文化面での治績である。

<sup>55</sup> メアリーの戴冠式は、1543 年 9 月 9 日に執り行われた。即位と戴冠が異なるのは、王母マリー・ドゥ・ロレーヌとアラン伯の間の確執があったことによる。王母マリー・ドゥ・ロレーヌと 2 代アラン伯の確執は、王女メアリーへのイングランドとフランスからの結婚申し込みにも現れていた。

<sup>56</sup> ハミルトンは、1542 年から 1554 年まで摂政職にあった。その後、1554 年から 1560 年までは王母マリー・ドゥ・ロレーヌが摂政職にあった。その後はメアリー女王が親政を執った。

<sup>57</sup> 同君連合の期間は、スコットランドにとって、激動と屈辱と苦難の時代であった。国王が国を留守にした。ジェイムズ 1 世は、イングランド王を兼ねた 22 年間に、わずか 1 回しかスコットランドを訪れていない。

両国は、それぞれ独立した別国である同君連合になった。人口90万人に満たないスコットランド国王が、その5倍の450万人のイングランド国王を兼ねることになったが、その後の22年間で1回しかジェームズ6世はスコットランドに帰っていない。それは、ジェームズ6世がイングランドでの宮廷生活をエディンバラでの生活より好んだからであり、同時に、政治的にも経済的にも先んじていたイングランドの仕組みを学びスコットランドに導入するためには、一日たりともロンドンを留守にできなかったからであろう。いろいろと解釈されるが、彼は、その22年間に、1度しかスコットランド(エディンバラ)に戻っていない事実を確認しておく必要がある。

ジェームズ6世のスコットランドの統治方法は、彼自身はロンドンにいて、ペンでスコットランドを治めるものであった。スコットランド総督を2代レノックス公リユートヴィック・ステュワートとした。またジェームズ6世の「同君連合」の統治方法論では、両国の議会を連合形態に持ち込み、同時に、宗教による両国の連合を図るところを考えていた。しかし、この問題はジェームズ6世の手に負える問題ではなかった。ジェームズ6世のこの考えた両国議会の連合は、後のアン女王(在位1702年-1714年)時代に「連合王国」として実現した。

ジェームズ6世が残してきた問題に「スコットランド国教の統一」の問題があった。ジェームズ6世は、司教制度を拒否していた改革派の教会に対し、司教国会議員を任命して対抗した<sup>58</sup>。しかし、長老派の勢いが勝っていたために、ジェームズ6世は、教会の長が国王であることに徹底的に反対しているアンドリュー・メルヴィル<sup>59</sup>(Andrew Melville)(1545年生-1623年没)を1606年にロンドンに呼び出し、スコットランドから追放した。1618年、パースに聖職者会議を召集し、「パース5か条(Five Articles of Perth)」で司教制を強化した。この中には、長老派が最も反対していた聖餐のパンとブドウ酒を受けることも含まれていた。イングランド王ジェームズ1世は、「同君連合」王国の紋章については、大きな貢献をなし

---

またその後の多くの国王もスコットランドを訪れていない。その間、スコットランドでは、実力貴族や部族の対立、抗争が一層激化し、それに宗教をめぐる対立・抗争も起こり、さらにイングランドのスコットランドに対する差別・蔑視に苦しめられた。

<sup>58</sup> 1604年、ハンプトン・コート宮殿(Hampton Court Palace)に国教会、ピューリタンなどの宗教界の代表を集め会議を開き、その席上でイングランド王ジェームズ1世は、国教会の立場を採ること共に、ピューリタンやカソリックの極端な立場は排除することを宣言した。カソリックへの弾圧を恐れたグワイ・フォークス(Guido Fawkes)(1570年生-1606年没)を首謀者とする火薬陰謀事件が起こるが、未遂に終わる。ピューリタンの抵抗運動は、ジェームズ1世治世では目立った活動はなかったが、チャールズ1世の時代になって加速された。

<sup>59</sup> アンドリュー・メルヴィルは、「教会はイエス・キリストの王国であり、その国王は神であり、ジェームズ6世はそのメンバー」と主張している。それに対し、ジェームズ6世は、王は教会の単なるメンバーではなく、教会と国家の長であると、考えていた。ジェームズ6世は、ブラック・アクトによって、国王が最高権威者であることを規定し、司教制度を謳った。

た。スコットランド、イングランド、アイルランドの3王を兼ねるジェームズ1世は、楯に3王の紋章を組み込み、楯には優位と劣位の場合があり、どの国王の紋章を優位あるいは劣位にするかが問題であった。ジェームズ国王は、紋章の構成要素を同じにし、イングランド王ジェームズ1世の紋章とスコットランド王ジェームズ6世の紋章では、その組み合わせによって、イングランド優位とスコットランド劣位の使い分けをした<sup>60</sup>。

大紋章でも、同様に、イングランド優位の配置とスコットランド優位の配置で使い分けた。イングランド王ジェームズ1世の大紋章では、向かって左側にライオンと右側にユニコーンが配置された。またスコットランド王ジェームズ6世の大紋章では、向かって右側にライオンと左側にユニコーンが配置された。

## 6.2 「連合王国」の成立

イングランドは連合を推進した<sup>61</sup>。これは、単に王位継承の問題だけではなく、多くのその他の懸案も連合王国議会在議することを目論んで、連合を推進した。一方、スコットランドは、連合がイングランドの乗っ取り以外の何ものではないと判断し、警戒していた。1706年、ロンドンにて、両国の31人の代表が連合会議を開いた。この会議では、スコットランドの教会組織、裁判、司法制度はそのままにすること、各都市の特権は引き続き認めること、そしてスコットランド議会は閉じてイングランド議会と合同し、ならびにハノーヴァー家への王位継承が同意された。翌年の1707年5月1日に「連合法」(The Act of Union)が施行され、イングランドとスコットランドを合わせた「グレートブリテン」が創られた。

同君連合の関係では、両王国は別国で、スコットランドには不利な面<sup>62</sup>があったので、イングランドとの連合を望む動きが強くなった。伝統的にスコットランドとの友好関係にあったフランスが、ジョン・チャーチル<sup>63</sup> (John Churchill, 1<sup>st</sup> Duke of Marlborough) (1650年

<sup>60</sup> イングランド王ジェームズ1世の紋章で、楯の構成要素は同じにし、3頭のライオンと百合の花を2箇所に配置し、イングランド優位にした。スコットランド王ジェームズ6世の紋章では、立ち姿のライオンを2箇所に配置し、スコットランド優位にした。

<sup>61</sup> イングランドの賄賂工作が展開された。スコットランドの有力貴族に対する賄賂であった。2代アーガイル公ジョン・キャンベル (John Campbell, 2<sup>nd</sup> Duke of Argyll) (1678年生-1743年没) に対する賄賂のみならず、1705年にはイングランド貴族のグリニッジ伯位を叙爵した。クイーンズバリ公ジェームズ・ダグラス (James Douglas, Duke of Queensberry) (1662年生-1711年没)、グラスゴウ伯デイヴィッド・ボイル (David Boyle, Earl of Glasgow) (1666年生-1733年没) も賄賂を受けて、1706年にロンドンの会議に代表として参加した。

<sup>62</sup> スコットランドの独立国としての不利益は明確であった。たとえば、同じ国王を戴きながらイングランド人は新大陸への貿易が自由であったのに対し、スコットランド人にはそれが禁止されていた。経済的不利益があった。

<sup>63</sup> ジョン・チャーチルは、ジェームズ2世の愛妾であったジョンの姉のアラベラ・チャーチル (Arabella Churchill) (1648年生-1730年没)の余慶で、ヨーク公ジェームズの小姓・侍従に抱えられ、将軍となった。

生-1722年没)の指揮する軍勢に完全に屈服したことによって、イングランドとスコットランドの連合の機運が高まり、1707年に「連合法」が施行され、イングランドとスコットランドを合わせた「Great Britain」(「グレートブリテン王国」)が誕生した。国王の称号も「Queen of England, Scotland, France and Ireland」から「Queen of Great Britain, France and Ireland」に変更された。この連合の主要な収穫の1つは、アン女王後の王位継承<sup>64</sup>において、ハノーヴァー家から国王を迎えることにスコットランドも反対しないということであった。連合に対する両国の思惑・期待であるが、スコットランドは、経済的発展の余慶を期待したのに対し、イングランドは、スコットランドの税収と兵力の利用が可能になると考えた。両国は、連合に当たって同床異夢であった。

両国の連合以後、国王の紋章は改訂された。この紋章は、従来のイングランドとフランスを組み合わせた紋章から、フランスをはずし、イングランドとスコットランドを縦にそれぞれ二分して組み合わせ、それを第1および第4クォーターに配置し、「グレートブリテン」を強調し、第2クォーターにはフランス、第3クォーターにはアイルランドを配する構成に改訂された。アン女王の玉璽は、連合以後、イングランドを象徴するばらとスコットランドを象徴するあざみのバッジが一本の木から出ているようにデザインにされ、両国の連合が強調された。

アン女王は、1714年8月に脳出血のためにケンブリッジ宮殿で49歳の一生を終え、ステュアート王朝も閉じた。

## むすびにかえて

ダル・リアダ王国ではスコットランドの中央部であった領土が、スコシア王国ではロージアンが加えられ、デイヴィッド1世以後、ロス、マリ、ケイスネス、サザーランド、スト

---

またジョンは、若い頃にはチャールズ2世の愛妾バーバラ・ヴィリアース(1641年生-1709年没)の寵愛を受けたが、アン王女のお気に入りの女官であったセアラ・ジェニングズ(Sarah Jennings)(1660年生-1744年没)と結婚した。チャーチルは、アン王女の治世下では、主計長官、対仏同盟連合軍の総司令官として、外交軍事を任せられていた。チャーチルは、アン王女からモールバラ公爵を叙爵され、5千ポンドの年金を与えられた。1704年のスペイン継承戦争では、フランスとそれに対抗する同盟軍の戦いでは、同盟軍を指揮し、バイエルンの西方、ドナウ河畔の小村プリントハイムで一大決戦し、5万の及ぶフランス軍を打ち破り、フランスの総司令官クラール元帥を捕虜にした。

<sup>64</sup> アン女王にはデンマーク王フレデリク3世(Frederik III)(在位1648年-1670年)の次男ゲオルクとの間に14人の子女が生まれ、10歳まで成長したグロスター公ウィリアムが1700年に他界したことによって、その全てを失って、王位継承者がいなかった。連合が進められているとき、スコットランドでは、アン女王の死後には、ジェームズ2世の子であったジェームズ・エドワード・ステュワートを王を迎えることが、一方では、考えられていた。スコットランドはハノーヴァー家からアン女王の後継者を迎えることに反対していた。

ラスクライド、ギャラウェイが加えられ、アレグザンダー 3 世の治世下でヘブリディーズ諸島、ジェームズ 3 世の治世下でシェトランド諸島とオークニ諸島が加えられた。スコットランド人の領土は、13 世紀初めにイングランドとの国境線、13 世紀後半にはヘブリディーズ諸島、15 世紀には、オークニ諸島やシェトランド諸島をスコットランド領に加えて、今日のスコットランドと同じ広さに達した。17 世紀からの「同君連合」においても、スコットランドの領土意識は、ジェームズ 6 世の治世下の領土意識と遜色はなかったと理解される。「連合法」(あるいは「合同法」)によって、イングランド議会とスコットランド議会が統合され、「グレートブリテン」が成立したことによって、スコットランド人は、何をアイデンティティとして活動したのであろうか。

イギリス人としてのアイデンティティを抱きながら行動したのであろうか。もしそうであったならば、何故にそのようなアイデンティティを持ち得たのであろうか。イングランドとスコットランドの歴史を見る限り、「連合法」成立以前の両王国は、異なったアイデンティティによって動かされていたと考えられるからである。

#### 参考文献

- デイヴィッド・アーミティジ 著 (平田・岩井・大西・井藤 共訳)『帝国の誕生』日本経済評論社 2005 年 6 月
- マックス・ウェーバー 著 (武藤・藺田 宗人・藺田 坦 共訳)『宗教社会学』創文社 1978 年 6 月
- マックス・ウェーバー 著 (大塚 久雄 訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989 年 1 月
- マックス・ウェーバー 著 (阿閉 吉男・脇 圭平 共訳)『官僚制』角川文庫 1971 年 8 月
- マックス・ウェーバー 著 (脇 圭平 訳)『職業としての政治』岩波文庫 1980 年 3 月
- デシデリウス・エラスムス著 (箕輪 三郎訳)『平和の訴え』岩波文庫 1961 年 6 月
- インマニュエル・カント著 (宇都宮 芳明訳)『永遠平和のために』岩波文庫 1985 年 1 月
- 梶田 孝道 著『統合と分裂のヨーロッパ』岩波新書 1993 年 11 月
- 川畑 洋一 編著『現代世界とイギリス帝国』ミネルヴァ書房 2007 年 6 月
- 北 政巳 著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店 2003 年 3 月
- ジョン・キャンベル著 (坂本 賢三 著)『中世の産業革命』岩波書店 1978 年 12 月
- エドモンド・キング 著 (吉武 憲司 監訳)『中世のイギリス』慶応義塾大学出版 2006 年 11 月
- リンダー・コリー 著 (川北 稔 監訳)『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会 2000 年 9 月
- バルーチ・スピノザ 著 (畠中 尚志 訳)『国家論』岩波文庫 1971 年 9 月
- ウィリアム・シェイクスピア 著 (木下順二訳)『マクベス』岩波文庫 2007 年 7 月
- ウィリアム・シェイクスピア 著 (松岡和子訳)『リチャード 3 世』ちくま文庫 2007 年 3 月
- 塩川 伸明 著『民族とネイション』岩波新書 2008 年 11 月
- アダム・スミス 著 (大内 兵衛・松川 七郎 共訳)『諸国民の富』(四) 岩波文庫 1992 年 4 月
- フェルディナント・テンニエス 著 (杉之原 寿一 訳)『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)(下)』岩波文庫 1972 年 2 月
- 増田 史郎 著『ヨーロッパとは何か』岩波新書 1967 年 7 月



- エドゥイン・ミュア 著 (橋本 楨矩 訳) 『スコットランド紀行』 岩波文庫 2007年  
ジョン・ミルトン著 (新井明/田中浩共訳) 『教会統治の理由』 未来社 1986年4月  
トマス・モア 著 (平井 正穂 訳) 『ユートピア』 岩波文庫 1971年10月  
森 護 著 『スコットランド王国史話』 大修館書店 1996年12月  
森 護 著 『英国王室史話』 大修館書店 1988年7月  
ヨーハン・ホイジンガ (堀越 孝一 訳) 『中世の秋 (上) (下)』 中公文庫 1984年4月  
ジェフード・デランティ 著 (山之内 靖・伊藤 茂 共訳) 『コミュニティ』 NNT出版 2007年4月  
ジグムント・バウマン 著 (奥井 智之 訳) 『コミュニティ』 筑摩書房 2008年1月  
ジョン・ロック 著 (鶴飼 信成 訳) 『市民政府論』 岩波文庫 1971年1月